

## 【B年】受難節第4主日(2022年3月27日)

## 【旧約聖書日課】出エジプト記 24章12～18節

12主が、「わたしのもとに登りなさい。山に来て、そこにいなさい。わたしは、彼らを教えるために、教えと戒めを記した石の板をあなたに授ける」とモーセに言われると、<sup>13</sup>モーセは従者ヨシュアと共に立ち上がった。モーセは、神の山へ登って行くとき、<sup>14</sup>長老たちに言った。「わたしたちがあなたたちのもとに帰って来るまで、ここにとどまっていなさい。見よ、アロンとフルとがあなたたちと共にいる。何か訴えのある者は、彼らのところに行きなさい。」

<sup>15</sup>モーセが山に登って行くと、雲は山を覆った。<sup>16</sup>主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日の間、山を覆っていた。七日目に、主は雲の中からモーセに呼びかけられた。<sup>17</sup>主の栄光はイスラエルの人々の目には、山の頂で燃える火のように見えた。<sup>18</sup>モーセは雲の中に入って行き、山に登った。モーセは四十日四十夜山にいた。

## 【使徒書日課】

## コリントの信徒への手紙二 4章1～6節

1こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません。<sup>2</sup>かえって、卑劣な隠れた行いを捨て、悪賢く歩まず、神の言葉を曲げず、真理を明らかにすることにより、神の御前で自分自身をすべての人の良心にゆだねます。<sup>3</sup>わたしたちの福音に覆いが掛かっているとすれば、それは、滅びの道をたどる人々に対して覆われているのです。<sup>4</sup>この世の神が、信じようとはしないこの人々の心の目をくらまし、神の似姿であるキリストの栄光に関する福音の光が見えないようにしたのです。<sup>5</sup>わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。<sup>6</sup>「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

## 【聖書協会共同訳】(2018年版)読み比べ

## 出エジプト記 24章12～18節

12主はモーセに言われた。「山に登り、私のもとに来て、そこにいなさい。私は彼らに教えるために、律法と戒めを書き記した石の板をあなたに授ける。」<sup>13</sup>そこで、モーセとその従者ヨシュアは立ち上がり、モーセは神の山に登った。<sup>14</sup>モーセは長老たちに言った。「私たちがあなたがたのところへ帰るまで、この場所で待ちなさい。ここに、アロンとフルとがあなたがたと共にいる。訴えのある者は誰でも、彼らのところに行きなさい。」

<sup>15</sup>こうしてモーセが山に登ると、雲が山を覆った。<sup>16</sup>主の栄光がシナイ山に宿り、雲は六日間山を覆った。七日目に主が雲の中からモーセに呼びかけられた。<sup>17</sup>主の栄光はイスラエルの人々の目には、山の頂を焼く火のように見えた。<sup>18</sup>そこで、モーセは雲の中に入り、山に登った。モーセは四十日四十夜山にいた。

## コリントの信徒への手紙二 4章1～6節

1こういうわけで、私たちは、憐れみを受けてこの務めに就いているのですから、落胆しません。<sup>2</sup>かえって、恥じて隠したりせず、謀によって歩まず、神の言葉を曲げず、真理を明らかにし、神の前で自分自身をすべての人の良心に推薦します。<sup>3</sup>私たちの福音が覆い隠されているとするなら、それは、滅びる者たちにとって覆い隠されているのです。<sup>4</sup>彼らの場合、この世の神が、信じない者の心をくらまし、神のかたち〔別訳→像〕であるキリストの栄光に関する福音の光が見えないようにしたのです。<sup>5</sup>私たちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。<sup>6</sup>なぜなら、「闇から光が照り出でよ」と言われた神は、私たちの心の中を照らし、イエス・キリストの御顔にある神の栄光を悟る光を与えてくださったからです。

(新共同訳)

【福音書日課】 マルコによる福音書 9章2～10節

<sup>2</sup>六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、<sup>3</sup>服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。<sup>4</sup>エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。<sup>5</sup>ペトロが口をはきんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」<sup>6</sup>ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。<sup>7</sup>すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」<sup>8</sup>弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。<sup>9</sup>一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。<sup>10</sup>彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

マルコによる福音書 9章2～10節

<sup>2</sup>六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。すると、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、<sup>3</sup>衣は真っ白に輝いた。それは、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほどだった。<sup>4</sup>エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。<sup>5</sup>ペトロが口を挟んでイエスに言った。「先生、私たちがここにいるのは、素晴らしいことです。幕屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのために。」<sup>6</sup>ペトロは、どう言えばよいか分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。<sup>7</sup>すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これは私の愛する子。これに聞け。」<sup>8</sup>弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはや誰も見えず、イエスだけが彼らと一緒におられた。  
<sup>9</sup>一同が山を下っているとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことを誰にも話してはならない」と弟子たちに命じられた。<sup>10</sup>彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

マタイ 17:1~13 (新共同訳)

<sup>1</sup>六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。<sup>2</sup>イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。<sup>3</sup>見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。<sup>4</sup>ペトロが口をはきんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」<sup>5</sup>ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。<sup>6</sup>弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。<sup>7</sup>イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」<sup>8</sup>彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった。  
<sup>9</sup>一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。

ルカ 9:28~36 (新共同訳)

<sup>28</sup>この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。<sup>29</sup>祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。<sup>30</sup>見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。<sup>31</sup>二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。<sup>32</sup>ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。<sup>33</sup>その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。<sup>34</sup>ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。<sup>35</sup>すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。<sup>36</sup>その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・3月27日「受難節第4主日」の日課主題は「主の変容」。主イエスが三人の弟子たちを連れて高い山に登り、その姿を変えられたという「主の変容(山上の変貌)」の逸話は、伝統的な主日聖書日課表で「受難節」中に置かれる(「改訂共通聖書日課」では受難節第2主日)が、典礼暦を重んじる教会では別に「主の変容の主日」の記念日を設けており、カトリック教会や聖公会では8月6日を、ルーテル教会では「受難節」直前の主日をこの記念日としている。

・福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「主の変容」の逸話の途中までの箇所。旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、エジプトを出たモーセと民がシナイ山で「律法」を授与され契約の民となった出来事を要約する箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、パウロが「落胆しない」理由をキリスト信者としての自己理解に照らして語る箇所の冒頭。

**旧約日課(出エジプト24章より)**

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典「律法」で第二巻として置かれ、「申命記」まで続く「モーセ物語」の最初の巻。「モーセ誕生物語」から始まり、「モーセ召命物語」、「十の災いと過越しの出来事の物語」、「出エジプトの出来事」、「荒れ野の三つの逸話」、「シナイ契約の物語と金の雄牛事件の逸話」、「幕屋建設に関する指示と実施」によって構成される。日課箇所は、「シナイ契約の物語」の中で、「シナイ契約の逸話」と「金の雄牛事件の逸話」を結合するためにまとめられた要約記事である。

・「シナイ契約」は、日課箇所直前に置かれた「契約締結式」の場面によって明示的に描かれている事柄で、19章の場面設定、20章の「十戒(言葉)」授与場面、21~23章の「法」授与を踏まえて描かれている。「モーセ物語」の最終巻である「申命記」は、この「シナイ契約」とは異なる荒れ野で結ばれた「モアブ契約」と呼ばれるものがあることを追加的に叙述している(申命記29~30章)。「シナイ契約」と「モアブ契約」は、どちらも神から授けられた「律法」を民が聞き、行い、守ると応答するところに成立した契約となっている。しかし、「シナイ契約」が、そもそも神の一方的な選び出しによって導かれてきた民に保護の保証を与える片務的契約の側面が強いのにに対して、「モアブ契約」は、神が民に与えてきた保護の実績を踏まえてより双務的に民の責任を問うものとなっており、懲罰的な意図をも含んだものとなっている。

・日課箇所は、福音書の「主の変容」の逸話の予型の一つに位置づけられ、多くの場面描写が象徴的に「主の変容」の逸話に導入されている。また、「四十日四十夜」という日数は、明らかに、「主イエスの荒れ野の誘惑」の日数に導入されたもので、福音書記者が「シナイ契約の物語」を主イエス理解の重要な典拠にしていたことは明白である。

**使徒書日課(Ⅱコリント4章より)**

・「コリントの信徒への手紙二」は、使徒パウロが自らの宣教団活動の一環で創設したコリント教会に宛てて記した一連の書簡の一つ。「使徒言行録」18章によると、パウロらは1年半にわたってコリントに滞在し、同地のユダヤ会堂を足掛かりに宣教活動を進め、多くの信者を獲得しており、その中には複数の「会堂長」が含まれていた。コリントは、古代ギリシアの都市国家の一つとして前9世紀に建設されたが、前2世紀に共和政ローマによって破壊され、前1世紀にユリウス・カエサル の指示によって再建、当初は解放奴隷が入植し、後にはローマ人、ギリシア人、ユダヤ人の居住地として発展した。同地のユダヤ人社会は比較的大きな規模で維持されていたと考えられ、クラウディウス帝による「ユダヤ人のローマ市からの追放令」(49年ごろ)によってローマ市を退去したユダヤ人の一部はコリントに移住してきていたとされる。パウロらが宣教活動を開始した時期は、この一時的にユダヤ人移住者が急増していた頃で、流浪生活によって定住ディアスポラ・ユダヤ人と比べてもアイデンティティに自由度の高かった者たちには、パウロらの宣教を聞き入れる余地が大きかったと考えられる。これは、しかし、彼らがより自由に、自発的主体的に考え行動するユダヤ人であったということであり、パウロの宣教や指導に飽き足らず、ペトロ(ケファ)やアポロの指導も受け、信者各人が自分の支持する指導者を持ち、その名を旗印に教会内に分派活動が広がることにもなったと考えられるのである(Ⅰコリ1章などを参照)。パウロは、コリント教会でその混乱ぶりを憂う信者らからの相談を受けとめて、まず「手紙一」を教会に宛てたが、その意図は必ずしも十分に伝わらず関係が悪化、その後、関係改善と和解が一定程度進み始めたところで、「手紙二」を記し送ったものと推察される。なお、「手紙二」の成り立ちについて、歴史批評研究の立場からは、元来別個の複数の書簡を一つの書簡に再編集したものではないかと考えられている(特に8~9章)。

・日課箇所では、パウロは、コリント教会の人々との間で衝突が起き、互いに傷づいたことを踏まえながら、それでも落胆することなく、自らの務めである宣教活動に邁進する者であろうとしていることを語っている。

・日課箇所では、特徴的な用語の使用が見られる。4節「似姿(エイコーン)」は、福音書では銀貨に刻まれている「肖像」を指す語として用いられるだけであるが、「パウロ書簡」および「ヨハネ黙示録」で多用されている。4節・6節「栄光(ドクサ)」は、元来「意見・思い」を意味する語で、派生的に「称賛(する意見)」「讚美(する思い)」として用いられ、結果として教会用語ではもっぱら「栄光」と訳されるようになった。4節・6節「光(フォティスモス/フォース)」と6節「闇(スコトス)」の対比的用例は「パウロ書簡」に特徴的。6節「悟る(=知識、グノーシス)」は「パウロ書簡」で広く用例があるが、特に「コリント両書」に多く見られる。

## 福音書日課(マルコ 9 章より)

・日課箇所は、主イエスが三人の弟子たちを伴って山に登られたときに、光り輝いてモーセとエリヤと共に語り合う姿を弟子たちに示されたという逸話伝承に基づく物語の一部。この逸話物語は、「ペトロの信仰告白と主の受難予告」の逸話物語と「六日の後」という時間を挟んで接続しており、大きなまとまりの逸話伝承として初期教会で保存されていたと考えられる。共観福音書で並行して伝えられているが、細部で各福音書に違いがみられ、特に後半部(下山中の主イエスと弟子たちとの対話)の扱いには差が見られる。

・1 世紀ごろのユダヤ伝承で、死なずに昇天した(神のもとに行った)とされていたのは、エノク(創 5:23)、モーセ(申 34:6 から類推)、エリヤ(王下 2 章)の三人である。エリヤは、伝説的要素の強い預言者であるが、それゆえにモーセと並んで預言者を代表する人物とみなされており、終末思想を強めた預言者らによって、「主の(再来の)日」に先だてて遣わされる「再来のエリヤ」という思想が生まれている(マラキ 3:23)。

・「山(オロス)」に関連する場面設定は、「マルコ福音書」の場合、日課箇所の他に、①12 人の弟子を選んで「使徒」とされた(3:13 以下)、②ゲラサ地方に出向いたときに出会った悪霊に憑かれた男の居場所(5 章)、③弟子たちを舟で先に行かせられて一人祈られたとき(6:46)、④受難物語中に繰り返し描かれる「オリブ山」に関連する逸話、などが見られる。その中で、「高い(ヒュプセーロス)山」と表現されているのは、日課箇所のみである。「ヒュプセーロス」は、物理的な高さを表す場合だけでなく、地位や身分などの概念的な高さも意味するので、「高い山」は「特別に高貴な山」を暗示していると考えられる。「旧約」では、「神の山」とも呼ばれる特別な山として、「シナイ山(ホレブ山)」が繰り返し取り上げられている。「シナイ山」は、「モーセ物語」のシナイ契約の場面であるのはもちろん、「エリヤ物語」でもエリヤの再召命の場面(王上 19 章=「ホレブ山」として設定されている)。

・5 節「仮小屋(スケーネー)」は「幕屋」とも訳される。荒れ野の「仮庵」よりは、荒れ野の旅中モーセが神と向き合った「会見の幕屋」または聖所としての「幕屋」が暗示されているのだろう。

・7 節「これはわたしの愛する子。これに聞け」は、主イエスの洗礼の場面で天来の声として示される「あなたはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」(1:11)の変形句。聖霊授与を伴ったとされる主イエスの洗礼によって示される受洗者のアイデンティティを示す。

・10 節は、マタイおよびルカは伝えない句。「マルコ福音書」は、「主の変容」の出来事が「死者の復活」について暗示するための出来事であったと考えている。

## 主日礼拝の讚美歌から

- ・21-205 番「今日は光が」(= Ⅱ2 番、Ⅰ55 番)は、19 世紀英国教会司祭の J. エラートンがチェスター大聖堂用の讚美歌集のために作詞した、主日の意義を歌う讚美歌。曲は、「幼子の日(無辜の聖嬰兒の記念日)」のための讚美歌に付けられたものを転用。
- ・21-509 番「光の子になるため」は、米国聖公会信徒の女性教会音楽家トマーソンの作詞作曲。1966 年夏の異常な猛暑の中で着想された。
- ・21-285 番「高き山の上」(= Ⅱ44 番)は、15 世紀英国のセーラム典礼聖務日課書に「イエスの変貌の祝日」のための聖歌として収められたラテン語聖歌。曲は、18 世紀フランスで発行された聖歌集から。

## 21-205「今日は光が」

*This is the day of light*

1. This is the day of light — / let there be light today! / Arise, O Christ, to end our night / and chase its gloom away.
2. This is the day of rest — / our inner strength renew; / on lives by many cares oppressed / send your freshening dew.
3. This is the day of peace — / with peace our spirits fill; / bid all the blasts of discord cease, / the waves of strife be still.
4. This is the day of prayer - / let earth to heaven draw near! / Lift up our hearts to seek you there; / come down to meet us here.
5. This is the first of days: / come with your living breath / and wake dead souls to love and praise, / O Victor over death!

## 21-509「光の子になるため」

*I want to walk as a child of the light*

1. I want to walk as a child of the light; / I want to follow Jesus. / God set the stars to give light to the world; / The star of my life is Jesus.
- [Refrain] *In him there is no darkness at all; / The night and the day are both alike. / The Lamb is the light of the city of God; / Shine in my heart, Lord Jesus.*
2. I want to see the brightness of God; / I want to look at Jesus. / Clear Sun of righteousness, shine on my path, / And show me the way to the Father.
  3. I'm looking for the coming of Christ; / I want to be with Jesus. / When we have run with patience the race, / We shall know the joy of Jesus.

## 21-285「高き山の上」

*O Wondrous Type (O Wondrous Sight)*

1. O wondrous type! O vision fair / Of glory that the Church shall share, / Which Christ upon the mountain shows / Where brighter than the sun He glows!
2. From age to age the tale declare / How with the three disciples there, / Where Moses and Elias meet, / The Lord holds converse high and sweet.
3. With shining face and bright array, / Christ deigns to manifest to-day / What glory shall be theirs above / Who joy in God with perfect love.
4. And faithful hearts are raised on high / By this great vision's mystery; / For which in joyful strains we raise / The voice of prayer, the hymn of praise.
5. O Father, with the eternal Son, / And Holy Spirit, ever One, / Vouchsafe to bring us by Thy grace / To see Thy glory face to face. / Amen.

## 来週の誕生日 (3月27日~4月2日)